

『KAITEKIのかたち』とは

—「KAITEKIのかたち」展／アートと技術の化学反応—

大久保浜に沈めた全長百メートルの紙。陸から海へとつながるその紙に絵を描き続けながら、海底から上がつてくる日比野克彦氏の姿は圧巻だった。あれからもう、ひと月がたつのか。

渋谷スパイラルガーデンにて開催された『KAITEKIのかたち』アートと技術の化学反応。ここに、三宅島で制作された日比野氏の作品が展示された。白い円形の会場に、アルミ質の銀円柱型の仕切りが吊されていて、現代的な雰囲気は入つただけで不思議な感覚になる。

あの、日比野氏の作品。海岸で広げ、制作に立ち会った二十名ほどで必死に紙を巻いた、あの作品。百メートルの紙は、重さにするとなんと三十キロ。海岸の砂をとりながら、乾かしながら、「あ、ちょっと右に寄つてる！少しずらして！」などと声を掛け合いながら、重くなつていく作品を巻きとる。こんなアートの現場に立ち

会えたことは希有な体験で、その記憶が鮮明によみがえつてくる。

あのときは、どんなふうに展示がなされるのか想像もつかなかつた。黒い海岸に広がるその作品はとても存在感のあるものだつたが、展示会場の壁一面に広がつた光景を前に、またこの作品制作がいかに大きな取り組みであつたかを体感する。

百メートルの全貌は縮尺版になり、日比野氏の解説つきで展示されており、実際の作品は巻き取られた作品から一部が公開されていた。この公開されている部分は、一番表現したかった『キワ』であると日比野氏は語つた。

新企画！動画連動記事

この記事は、動画と一緒に見るとより楽しめます。携帯電話からバーコードを読みとるか、URLよりアクセスしてください。

<http://www.youtube.com/watch?v=GKkmK-cbBfk>



ある」感覺—それがこれから考えるべき、「KAITEKIのかたち」のかもしない。陸と水、その狭間である「キワ」への挑戦は、自然と人の生き方を考えさせる種なのではないだろうか。

(大西未希)



2011年
(平成23年)
8月1日
月曜日

あしたばん編集部
編集・発行 加藤文俊研究室
info@ashitaban.net

号外

三宅島に再上陸

三宅島大学チューター
上地里佳

七月三十日、ぐずついた天氣の中、三宅島行きの船『かめりあ丸』に乗船した。今回の旅路は、前回と違つて一人での乗船ということもあり、賑やかというよりは、じわじわと三宅島への近づいていることを感じながら就寝した。

そして翌朝、三宅島の錆ヶ浜港に到着した。以前の来島から一ヶ月経つていたこともあり、少し緊張しながら上陸となつた。そこでは、今回お世話になる『築穴製菓』さんが迎えに来てくれており、車内では三宅島の自然や文化についての様々な話をしてくれて、聞いているだけでとてもわくわくした。

(上地里佳)



『あしたばん』
バックナンバーは
こちらから

あしたばん
オフィシャルサイト
<http://ashitaban.net/>